

「タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学文学部・研究科1年 (小仲美齡)

学習成果

参加する前、私がこのプログラムに期待していたことはタイ語運用能力の向上と同時代にタイで生きる人たちの感情、考え方に触れることでした。小学3年から5年生の夏までタイの現地校に通っていたため、当時からタイがどのように変貌を遂げたのかにも興味がありました。

結果から述べると、期待した以上の成果を得ることができました。私以外に日本側の参加者がいなかったため、教授と一対一で学べました。タイ語学習については、経緯や使用場面によって4段階あるタイ語の表現を学び、それぞれに対応する文章を読みました。(王室の広報、外務省の告知、スポーツ新聞、気象予報、スラング、ジョークなど)チュラーロンコーン大学の教授がピックアップした資料は非常に適切で、読めばタイの気候風土、農産業、地理、タイ社会の構造や精神性が自然に立ち上がってくるようなものでした。例えばプラユット首相の国会答弁を読んだのですが、その中で彼は自身を有名な文学ラーマーヤナの英雄ラーマ王子にたとえ、一方対する新しい未来党の党首を物語中で倒される鬼になぞらえて暗に威圧していました。先生によればラーマーヤナはタイの政治、文化、歴史、芸術何を考える上でも押さえるべきだそうです。私は古典文学が現代にも強く影響を及ぼしていることを強く感じました。

今デモで問題となっている王制について、年配の教授にお話を伺う機会にも恵まれました。彼女は、若い人たちの主張が生きて伸びて行くのかもしれない、と認めつつも、王制を肯定し、王を守護する軍事政権を評価していました。私がタイ語を教わったもう少し若い教授は、評価を下すことはなかったのですが、一歩引いてフラットな立場にいるようでした。十分な数のタイ人と話したわけではないのですが、ここからでも年代ごとに政治への態度に差があることが窺えました。

このことと、先程の文学が今でも政治の引き合いに当たり前のように出てくることが印象に残りました。タイでは昔から続く伝統や文化が重視される一方、そこから抜け出そうとする動きもあるようだと感じました。

若者文化を知る機会もありました。若い人たちの間では、BL(ボーイズラブ)やk-pop、ソーシャルゲーム「原神」が人気があるようです。特に中国のBLにはまる人が多いと聞きました。流行の最先端に行くコンテンツとしての日本のプレゼンスは弱くはないにせよ支配的ではないようでした。彼らがそれらのコンテンツにどこを介してアクセスしているのか興味を持ちました。

一方私がタイにいたところと比べて日本の存在が強くなっていると感じたものもありました。和食です。当時は生魚や生卵は敬遠され、したがって寿司やすき焼きは好まれなかったのですが、今や大人気だと教えられ驚きました。やはり世界遺産に登録された影響が見られるようです。

以上がインプットで、次にアウトプットとして、話す、書く練習もしました。

授業は基本的にすべてタイ語で進行し、分からない単語の説明を英語で受けるというものでした。時々教授が私の意見を聞いてくださる場面があり、双方向的な授業でした。例えば私の希望で村上春樹の「海辺のカフカ」をタイ語で読んだのですが、この箇所は日本語ではどう書かれているのか、ムラカミの特徴は何だと思えるか、などについて意見を求められました。

書くことについては、短い作文やタイ語で詩を作るアクティビティがありました。韻の踏み方、有名な古詩の鑑賞などができ、とても有意義でした。

今後この経験をどう生かしていくかについてですが、私は二回生からは地理学を学ぶつもりです。そこでタイに焦点を当てて、マクロには近隣諸国との関係、ミクロにはバンコクの都市設計について研究したいと思いました。バンコクは洪水や渋滞に絶えず悩まされる都市だと告げられたので、どうすればよいのか考えてみたいと思ったためです。

本プログラムで見聞きしたことが、今後研究するうえで形を変え必ず役立つと信じています。